

解説：「四月の記憶」－抗米期の女性たちを象徴するひとつの例

ブイ・ティ・ロアン

ゴ・ヴァン・ニョー大尉は、203旅団に属する第1戦車大隊の大隊長だった。いくつもの戦車から成る大隊は、1975年4月30日の昼に、鉄の門を押し倒して独立宮殿に進入した。大隊の戦士たちの1人は、独立宮殿の頂上に解放の旗を立て、抗米戦争を終わらせる歴史的瞬間を記した。しかし、それより数時間前、その大隊長は、サイゴンの入り口で敵の激しい防御の炎を乗り越えようと、戦車を指揮していて戦死した。

サイゴンが解放されて20年後、作家チャン・ダン・コアは、1975年4月30日朝のニョーの戦死と、サイゴン橋での戦闘についての話を聞いたあと、ニョーの知り合いの多くの人々に出会った。作家は、ニョーと同じ部隊の上官や部下である、独立宮殿の頂上に旗を建てた人物や、ズオン・ヴァン・ミン大統領を逮捕した人物など、歴史の生きた証人たちに会った。その後作家は、ニョーの故郷の家で、彼の息子と妻と母に会った。

「四月の記憶」は、作家がこれらの邂逅について書いたものである。

物語は、短編集『沈む島』（チャン・ダン・コア著、青年出版社、2000年）に収められている（pp.43-61）。

「四月の記憶」は、ニョーの親しい人々が、以前と現在一彼が戦死した日から20年後、国が平和になり統一して20年後の現在一の彼について、彼の家族について、彼のもっとも親しい人々について語った記憶である。

ロアン（彼の妻）とスー（彼の母）の「記憶」を通して、記録は私たちに、祖国を防衛する戦争に自分の愛する子どもたちほとんどすべてを捧げた、ベトナムの農民の家庭の姿を見せてくれる。それらの烈士たちは、黙って耐えて犠牲を払った妻たち母たちを後に残したが、彼女たちはどのような思いを持ち、どのような生活をしているのだろうか。彼女たちは、具体的な女性たちであり、抗米戦争期のベトナムの女性を実際に代表している。彼女たちはまた、多くの時代を経て、民間に伝わる「望夫の女」、今も古典文学に伝わる「天地が風塵を巻き起こす時」¹の征婦たちの表象を作り出したひとつの民族の女性を代表している。

ベトナムでは、家庭について述べる時は、女性の役割を思う。逆に女性のことを語る時は、女性がその基礎となっている場所である家庭について考える。言い換えれば、女性の幸福は家庭と結びついている。女性は家庭のために生き、夫・子ども・父母・兄弟姉妹を気かけ、世話できるとき、本当に幸福なのである……。女性は家庭の物質的・精神的生活を考慮し、ととのえる者である。夫・子どものため、家庭のために、犠牲を払い、耐えることが、彼女たちの喜びであり、生きがいである。家庭の幸福のために、女性はすべてを犠牲にすることができるし、その用意ができて……。

しかし、戦争は女性に、彼女たちの家庭に、何をもたらしたか？スーやロアンや、スーの家庭の他の女性たち、ロアンが物語る話の中の女性たちの人生を通して、私たちは彼女たちがどれほど大きな犠牲と損失を被らなければならなかったかを想像することができる。その犠牲は家庭のための犠牲ではなく、逆に、戦争が家庭を奪い、愛する人々を奪い、彼女たちの幸福を奪ったためのものであった。従って、彼女たちの犠牲と損失は倍加し、苦しみは何倍も大きく、死よりも大きくなった。

ロアンの世代は、抗米戦争期の青年たちである。娘たちは「困難で危険で、さらに飢えていたが、とても楽しかった」中で成長した！彼女たちは、パーサンサン運動やバーダムダン運動、負傷者の運搬、弾薬の

1 【訳注】18世紀の女性詩人ドアン・ティ・ディエムによるチューノム演音本『征婦吟曲』の冒頭部分。17世紀から18世紀のベトナム南北抗争期に、出征する夫の無事を祈る妻の思いを述べた作品で、今も人々に好まれる。

運搬に参加した。青年突撃隊に入って、チュオンソン山脈の森の中で道を切り開いた人々もいた。彼女たちが楽しかったのは、若く、前途にすべてがあったからである。そのころ大きな道路では、毎日、出陣する軍隊が群れをなして通っていた。出かける若い青年たちも楽しくふざけていた……。彼らは、「ぼくの帰るのを待っていて、僕は帰ってくるから……」と約束した。そして20年後、作家チャン・ダン・コアと話す時、ロアンはその日の記憶を思い出して、「その青年たちのうち、帰ってきた者がいるでしょうか」と問いかける。

後方に残ったのは、次第に女性だけになっていった。彼女たちは相変わらず楽しくふざけて、戦場にいる人々、名前を知っているだけで顔を知らない人々を「からかって愛した」。ロアンもそれらの女性たちの中にいた。しかし彼女の「からかった」愛情が、現実になった。ニョーと彼女は、戦時の休暇で知りあい、後方と前線の間の手紙を通して愛しあった。結婚したのも、ある休暇の時だった。彼らの夫婦生活は、指で数えられる日数だった。ロアンの場合非常に独特だったのは、夫の父の勧めに従って、危険に満ちた境界の地にいる夫に、勇敢にも会いに行き、子どもを1人得たことである。子どもが生まれた時は、夫が戦場で倒れた時でもあった。ロアンは家にとどまって、子どもを育て、嫁のつとめをし、孝行な嫁という、1人の女性の夫の家族に対する本分を果たした。彼女は特別な女性であるが、夫のいない嫁は彼女だけではない。彼女はまさに「望夫の女」であり、まさにその家には、2人の望夫の女と、3人の烈士がいた。

ロアンは他の人と再婚することもできたが、自分だけの幸福を受け入れることはできなかった。彼女は夫の母と自分の息子のことを思った。彼女は、すでにニョーを失ったのに彼女をも失うという、母たちのさらなる損失を望まなかった……。他の人のために犠牲になり、他の人のために生きることは、ベトナムの女性の伝統の道徳である。ロアンは具体的な例である。

母のスーは、抗仏戦時に青年であった世代に属する。この世代の女性も、抗戦に参加したり、生産を増やし、農業税を納め、敵と闘う部隊に食糧を供給して、前線を支援した。必要な時には、彼女たちも民工に行き、食糧弾薬を運搬したり、道路を補修した……。多くの人々は戦闘で夫・子どもを失った。彼女たちは烈士の母や妻となったり、あるいは1人で子どもを育てる母となった……。

スーは幸運にも4人の息子に恵まれた家庭を持った。しかし抗米戦争が起こると、息子のうち3人が戦争に行き、3人とも次々と戦死した。母の家には、末の男の子しか残らず、1部屋全体が1968年、1973年、1975年に戦死した3人の息子たちを「祀る部屋」になっている。

スーは最初に戦死した息子の法事のちょうどその日に、第2の戦死の知らせを受け取った。どれほどの悲しみであっただろう。戦争が終わった日、すべての人々の共通の喜びの中で、母も、ニョーが帰ってきて、これからはや別離も死もないと希望していた。しかしまさにその晩、母はニョーの死を、奇妙な、この上なく神秘的な夢の中で予知した。

母の夢は実に奇妙である。それは、心霊の住むところ、「人の魂」の世界—生きている者と死んだ者の共通の世界、愛情と悲しみが永遠に続く場所であろうか。とにかく、そのように少しずつ悲しみを受け入れる準備ができていたおかげで、スーは「運命」の苛酷な打撃を受けても、倒れずにすんだのである。社会と周囲の人々、家庭に残された人々の支援によって、母は立ち直り、生き続けることができた。その貢献と、大きな犠牲と損失によって、母は「ベトナム英雄の母」の榮譽ある称号を受けた。

スーは何千人もの「ベトナム英雄の母」の1人であり、女性にとって単純で神聖な天賦の幸福の源泉である、親しい人々、家庭、夫、子ども……を戦争によって破壊され、奪われた、何百万人もの普通の女性の1人である。

「四月の記憶」は、女性と戦争の問題についての、価値ある参考資料のひとつである。

【片山須美子 訳】